

# 戦略で探る 近江の城

## 水口城

## 東海道を意識した2つの城郭

滋賀県立大学教授 中井 均

水口には2つの水口城が築かれています。ひとつは水口岡山城みなくちおかやまじょうと呼ばれる城で、天正13(1585)年なかむらかずうじに中村一氏によって築かれます。それまで甲賀は郡中惣ぐんちゆうそうと呼ばれる同名中が運営する地域で、巨大な城が築かれることはありませんでした。ところが豊臣政権になると甲賀はにわか注目されることとなります。それは東海道が縦貫していたことに他なりません。全国統一を目指す豊臣秀吉にとって、天正12年の小牧長久手合戦で徳川家康と勝敗を決することができなかったことは大きな不安材料となりました。家康領に近い近江において、街道上に城郭を構えることが急務となります。岡山は眼下に東海道を見下ろすことのできる、築城にはもってこいの場所でした。こうした状況より水口岡山城は豊臣秀吉の命令によって中村一氏が築いたものであったと考えられます。

後に城主となるのは増田長盛ましたながもり、長東正家なつかまさいえですが、両名ともに豊臣五奉行となる人物であり、秀吉がいかに水口を重要視していたかがうかがえます。

城は正家が関ヶ原合戦で西軍に与したため、合戦の後に廃城となり、さらに徹底した城割りによって遺構はほとんど残っていませんでした。ところが近年の発掘調査によって破壊された石垣が地中から検出され、水口岡山城は本丸、二の丸、三の丸が総石垣で築かれていることが明らかとなりました。さらにいち早く築城するために、近隣の寺院や大溝城から転用した材木・瓦を用いて築かれたことも判明しています。さらに興味深いのは城割りの状況です。城下町から見るところは徹底的に石垣を破壊しているのですが、見えない方、つまり北側には点々と石垣が残されています。どうも手抜き工事をおこなっていたようです。

この水口岡山城は織豊期しよくほうきの城郭構造をよく伝える城跡とし



て、2016年に国史跡に指定されました。

さて、今ひとつの水口城は別名碧水城へきすいじょうと呼ばれる水口の町の中心に築かれた城です。水口城といえば大半の人がこちらの水口城を連想されることでしょう。実はこの水口城は城郭の構えをしているのですが、城として築かれたものではありません。正式な名称は水口御茶屋と呼ばれるものです。

寛永11(1634)年、将軍徳川家光は上洛をします。この上洛は「御代替の御上洛」と呼ばれ、30万を超える大軍勢を引き連れてのものでした。上洛に際して将軍は親藩・譜代大名の居城に宿泊することとなっていました。近江では東海道水口宿に将軍専用の宿泊施設として御茶屋を新造しています。これが水口御茶屋で、小堀遠州が作事奉行を務め、幕府大工頭の中井大和守正知が大工を務めました。将軍家光のわずか1泊だけのために石垣を構え、水堀を巡らせ、櫓や枳形門まで備えた城が築かれたのでした。

その後使用されることなく、天和2(1682)年に加藤明友が入封し、水口藩が成立しますが、加藤家では将軍宿泊施設に入城するのは恐れ多いということで本丸には入らず、その外周に新たに二の丸を設けて藩庁としました。

中井 均(なかいひとし)

1955年大阪府生まれ。龍谷大学文学部史学科卒業。(財)滋賀県文化財保護協会、米原市教育委員会、長浜歴史博物館館長を経て現職。びわこ学院大学、金沢大学非常勤講師。NPO法人城郭遺産による街づくり協議会理事長。専門は日本考古学。特に中・近世城郭の研究。